「風葉和歌集」の構造
——哀傷部について——

米田明美

序

文永八年（一二七一）の冬、時の皇太后宮藤原（西園寺）姞子の命により撰せられた「風葉和歌集」（以後「風葉集」と略す）は、当時存在した二百に及ぶ物語の中から、千五百首余りにのぼる物語歌を抜き出し、配した歌集である。部立や詞書・歌材の排列は勅撰集の型を継承し、二十巻（但し、現存本は末尾二巻が散佚している）もの内容を有している。

これまで、この「風葉集」の部立排列・離別・羇旅・神祇・釈教・賀部の構成について考察を加えてきた。(注一) 今回は物語歌集としての特色の濃い哀傷部に関し、排列を中心にその構造を検討して行きたい。その構成や物語からの入集にどのような配慮がなされているかまた先行する勅撰集とのかかわりなどから、その独自性について言及してみたい。

一

まず哀傷部そのものの存在について考究してみたい。「哀傷」とは、死に際して生じる悲哀の感情を詠んだものであり、「万葉集」では死者を葬る折柩を挽く者が歌う褒の「挽歌」がそれに該当する。「古今集」においては、葬送・服喪・追悼そして辞世の歌等を主たる柱として巻十六に哀傷部が打ち立てられた。後「千載集」「新古今集」になると、更に無常を詠じた歌もそ

の範中に加えられている。ただこの哀傷部は、四季・恋・賀・雑・離別各部の様に勅撰集に必ず存する部ではなく、定着した部とは言い難い。八代集について哀傷歌自体は何らかの形で雑部等に収められていても、哀傷部そのものとして独立して打ち立てられていない勅撰集は、「金葉集」「詞花集」がある。十三代集まで拡げてみても、「新勅撰集」「続後撰集」、「風葉集」の後に編纂された「続拾遺集」「新後撰集」には置かれていない。哀傷歌そのものは集に収められていても、部が打ち立てられているか否かは、その部をどの程度評価しているかにつながるであろう。まして採用歌の多いということは、少ないよりその部を重視していることが原則として言えよう。

次の表は、「風葉集」と「風葉集」に先行する十一の勅撰集の哀傷部の採歌数が、全歌数のどのくらいの割合かを調べたものである。（猶、「風葉集」中心として、散逸部分のある雑部を抜いたためこの数字は絶対的なものではない。大凡の目安としてみていただきたい。）

A―各勅撰集の四季・神祇・釈教・離別・羇旅・哀傷・賀・恋部の歌数の合計。

全歌数	A	哀傷部歌数	歌数 勅撰集
1100	815	34(4.1)	古今
1425	1197	40(3.3)	後撰
1351	855	78(9.1)→55(6.1)	拾遺
1218	870	68(7.8)	後拾遺
650			金葉
415			詞花
1288	1043	61(5.9)	千載
1978	1563	100(6.4)	新古今
1374			新勅撰
1371			続後撰
1915	1550	96(6.2)	続古今
(1420)	1152	99(8.6)	風葉
1459			続拾遺
1607			新後撰
2800			玉葉

●（　）の数字は、各勅撰集のAに対するパーセントである。
●テキストは、「新編国歌大観」を用いた。「金葉集」の歌数は三奏本である。

この表を一見すると、まず哀傷部そのものが定着していない部であることが容易に理解されよう。「風葉集」の編纂された頃は、部そのものが打ち立てられていない集も多かったと言える。次に、「風葉集」の哀傷部の採歌数が秀いでていることも

挙げられよう。割合としては「拾遺集」の方がまさっているが、「拾遺集」の哀傷部には二十三首の仏教歌が入集されているためである。またこの哀傷部の採歌数は、「風葉集」内の各部の歌数からみても四季・雑・恋に次ぐものであり、これら四季・雑・恋の各部が勅撰集の主要な部立三本柱というべきものであることを考えれば、「風葉集」哀傷部の比重の大きさは評価すべきではないだろうか。

二

次に、哀傷部九十九首について、その内容の展開・排列を示す一覧表を掲げてみたい。

歌番号	物語名	詠者名	哀傷の分類	詞書の要約	歌語	排列
602	いはでしのぶ	皇后宮	父の死	…年もたちかへり侍にければ…	としのかへるらん	年改る
603	いはでしのぶ	関白(一条内大臣)	弔問	おなじころ…	あらたまる春	年改る
(604)	われから	兵衛佐	母の死	…梅壺のこうばいのおもしろきを見て	花	梅
(605)	かやが下折れ	宣耀殿少納言	弔問	…梅の花につけて…	花	梅
(606)	かやが下折れ	関白	妻の死	返し	花	梅
607	源氏物語	夕霧	柏木の死	…さくらのいとおもしろきをみて…	やどの桜	梅
(608)	みかぎがばら	春院	父の死	…花のさかりを御らんずるにも…	花こそ春の	梅
(609)	みかぎがばら	皇太后宮		御返し	花・昔の春	梅
						春

610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	
かやが下折れ	かやが下折れ	袖ぬらす	夜の寝覚	源氏物語	源氏物語		かやが下折れ	初音	源氏物語	朝倉	夜の寝覚	源氏物語	玉藻に遊ぶ 権大納言	
関白	中宮	女院	右大将―まさこ君	六条院	致仕太政大臣	紅梅右大臣	按察典侍	入道太政大臣	六条院	関白	中宮	致仕太政大臣	一条院女一宮	
弔間	院の死	院の死	母の死(偽死)	紫の上の死	息子(柏木)の死	兄(柏木)の死	弔間	弔間	紫の上の死	女二宮の死	母の死	紫の上の死	一条院の死	
…花をさしいれて…	その花にかきつけ…	…花を御覧じて…	…花をおりて…	…花のさかり…	…花のちりたる梢どもをみて…		…まつりの日一とせ…	…あやめにつけて…	…ほととぎすのなきけるをきかせ給て…	…ほととぎすのなきわたるも…	御ふくにおはしましけるころ…	むらさきのうへはかなくなり侍にける秋…	一条院かくれさせ給へりけるに…	
今年の春の花	花・今年の春	花	花の色	春のかきね	霞の衣・春	花のちりけん	神のいかきも	夏衣・根	山時鳥	時鳥	秋の夕露	古への秋・露	露・草の原	

桜 ← 葵祭 → あやめ 時鳥 時鳥 →

夏

624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637
袖ぬらす	袖ぬらす	うつほ物語		女すゝみ		源氏物語			夜の寝覚	いはでしのぶ	風につれなき		
女院	太政大臣	左大臣北の方	橘の右大臣	先帝	登華殿女御	紫の上	六条院	明石中宮	関白	関白	太政大臣	関白	左大臣
		(求婚)		辞世の歌	辞世の歌返し	辞世の歌	辞世の歌返し	辞世の歌返し	妻の死	皇后宮の死	入道関白の死	入道関白の死	入道関白の死
弘徽殿女御わづらひ侍けるに…	宣旨なくなりて後	左のおほいまうち君身まかりて後…	かへし	御こゝちかぎりに…	御返し	心ちわづらひ侍ける頃			…すゝきのうちまねびたりけれは…	…この秋はうらみまほしうとて	入道関白身まかりて…		
露・草の原	露・草の原	葎・浅茅	露・宿の葎	浅茅原・露	浅茅が露	萩の上露	露	秋風・露	花すゝき	あらしにまよふ野べの露	山里	山里・秋を名残の	露・秋を名残に
草の原				浅茅	萩				花すゝき		山里	山里	
				露									

638	源氏物語	桐壺帝	桐壺の更衣	…月あかかりける夜…	秋の月								
639	かやが下折れ	大将	妻の死	八月十五日…	秋のなかば								
640	源氏物語	薫大将	大君の死	…月のくまなかりける夜…	空行月								
641	かばね尋ぬる宮	三の宮	愛人の死	…むしのなきければ	虫のこゑ								
642	長月の別れ	式部卿の宮		…よはりゆくきりぎりすのこゑも…	秋も末葉 虫の音								
643	しのぶ草	関白	中納言の死	…秋のすゑつかた…	過ぬる秋								
644	嘆き絶えせぬ	麗景殿女御	春宮の死	十月ばかり…	しぐるれば								
645	末葉の露	一品宮	弔問	…しぐれのする日	しぐる、袖								
646	末葉の露	女宮	弔問の返し	御返し	しぐるなる								
647	あしたづ	前斎院	弔問の返し	…「のこる木の葉こそ思ひやれ」と…	梢にのこる木の葉散りみだれ行								
648	四季物語	紅葉の君		四季ものがたりの中に	底のみくづ								
649	風につれなき	関白	妻の死	女三の宮の思ひに…	夜半の霜								
650	すまひ	土佐の守の娘	兄の死	…雪のふる日によめる	ふる雪								
651	夢語り	前関白		…としのくれはてぬるもおどろかれて	年くれて								
						月	虫	虫	時雨	霜	雪	年の暮	
										晩秋			
						秋					冬		

652	源氏物語	桐壺の更衣	辞世の歌	やまひおもくなりて	限りとて・命	
653	女すゝみ	帝	辞世の歌	御こゝちれいならず…	限りあらむ・命	
654		中宮	辞世の歌返し	御かへし	命・此世	
655	有明の別れ	内大臣	辞世の歌	こゝちかぎりになりて…	この世	辞世の歌
656		中宮	辞世の歌返し	御かへし	この世	
657	闇のうつつの大納言	更衣	辞世の歌	やまひして…	この世	
658	風につれなき	冷泉院一品宮	辞世の歌	心ちかきりにおぼえ給て…	野山にもくちなん	
659	みかきがはら	宮大将	辞世の歌	…御みゝにきこえおくとて…	夕の雲のそら	
660	浜松中納言物語	左大将の娘		この世のほかになりなば…	夕の雲・烟	人の死を聞く
661	よもぎが原	春宮	女の死	…はかなくなりにけるときかせ給て…	浮雲	
662	しのぶ草	関白	中納言の死	中納言のわざのよ…	わかれ路	
663	女すゝみ	中将	先帝の死	先帝のわざのよ…	烟	葬送
664	源氏物語	六条院	葵の上の死	…鳥のへにおくり給て…	烟・雲ゐ	
665	源氏物語	致仕太政大臣	葵の上の死	おなじころ…	空の浮雲	

666	風につれなき	関白	冷泉院一品宮の死	…鳥辺野のかたに…	消ゆる白雲
667	風につれなき	関白	女三の宮の死	…おなじのに…	鳥野辺の露
668	風につれなき	関白	冷泉院一品宮の死	…一品宮のふくもぎ侍らで…	そめぬ衣
669	玉藻に遊ぶ 権大納言	関白	弔問	…くろききぬにやつれさせ給ひけると…	涙のふぢ衣
670	源氏物語	六条院	葵の上の死	…御ぞ奉れるにつけても…	うすゞみ衣
671	道心すゝむる	朱雀院	弔問		藤のたもと
672	道心すゝむる	大后宮	弔問の返し	御返し	藤衣
673	みかきがはら	一条女院	前春宮の死	…こき御袖のいろも…	藤衣
674	風につれなき	吉野院	弔問	…一条入道宮もうせ給ぬと…	涙のかゝる袖のいろ
675	源氏物語	大君	父の死	…くろき几帳のすきかげも…	色かわる袖
676	とこ中	関白	愛人の死	…紫苑の衣を誦経にせんとし…	衣も色もかわりけり
677	露のやどり	中将内侍	弔問	入道摂政身まかれりけるに…	袖だにいまかはぬに
678	住吉物語	関白北の方	乳母の死	…四十九日のわざし侍けるに…	しでの山路・袖
679	水あさみ	承香殿女御	父の死	父のふくぬぎ侍とて…	ふぢの袂はくちにけり

喪をはつ ←→ 服喪 ←→

680	681	(682)	(683)	684	685	(686)	(687)	688	(689)	(690)	691	692	(693)
六条院中将	源氏物語 六条院	初音	嵯峨野	いはでしのぶ	うつほ物語	鳴門	心高き春宮宣旨	いはでしのぶ	夜の寝覚	波のしめゆふ	源氏物語	源氏物語	おもかげこふる
		しかまの太政太臣	頭中将	関白	宣耀殿女御（昭陽殿）	女の霊	後冷泉院宣旨	関白	右大将	淑景殿女御	夕霧	蔵大将	三位中将
弔問	紫の上の死	内侍督の死	弔問	前斎院の死	父の死		弔問	前斎院の死	母の死	兵部卿宮の死	大宮の死	大君の死	愛人の死
…一めくりのをはりに…	これを御らんじて	…はてにもぬぎ侍らで…	中務のみこ身まかりて後…	前斎院のいみにこもりて…	父の左の大臣こゝちかぎりになりて…	女のゆくへしらずなして…	冷泉院かくれさせ給へりけるに…	…ありしながらのさまにて夢に…	母のおもひに侍けるころ…	兵部卿のみこかくれてのちに夢に…	…やり水のみぐさもかきあらためて…	…やり水のほとりなるいはにゐて	しのびたる女のはかにまゐりて…
涙・何のはて	涙	今日をばはて	哀	哀	（しでの山路）	しでの山みち	夢	夢	晩の夢	夢	みし人・宿の遺水	清水	命・道芝の露

遺水

追慕 ← 夢 → 口寄 ← 弔問 →

(694)	間のうつつの大納言	更衣		…左大将のゆめにみえ侍ける歌	行き、の道草葉
695	しづくに濁る	中納言	愛人の死	…のきのしのぶをみてよめる	忍ぶ草
(696)	露のやどり	弁少将母	権大納言の死	…をさなき子の侍けるを見てよめる	忍ぶの草
697	うつほ物語	内侍督	父の死	…としかげなくなりて後よめる	月日のゆくぞ
(698)	女のすくせ	第一の帝	女御の死	…かくれて後さむるよなく…	幾としとし
(699)	しらず	右衛門督		…この御手ならひをみて…	年へぬる
700	うつほ物語	橘の右大臣	妻の死	女におくれてとし月ありて…	年ふれど

忍ぶ草

年月へぬる

●歌番号は、中野荘次・藤井隆著『増訂風葉和歌集』に依る。また以下の引用もこれによる。
●○の付してある番号は、散逸物語及び、現存物語の散逸部分の歌であることを示す。
●）の有する歌は、贈答歌或は、連続して物語より抜き出されたことを示す。
●（　）は、物語本文に返した場合の内容補充を示す。

「風葉集」哀傷部は、前半（602～651）が四季排列、後半（652～700）は辞世の歌に始まり葬送・服喪・喪をはつ・夢・追慕等の時間排列になっていることが理解されよう。この様な排列について、前半の四季排列は「千載集」哀傷部にその傾向がみられ、「新古今集」哀傷部前半には季節を追う排列がなされている。後半の時間排列に至っては、既に「古今集」で試みられており、排列の一つの型として各勅撰集変化を持たせつつ受け継がれている。ただこの四季・時間排列とも、「風葉集」程歴然と配されている集は他にはない。勅撰集の哀傷部自体が歴史意識の根強い部であり、詠者の時代別等まとまった歌群として配置されることが多いのに対し、「風葉集」は物語の歌を集めた

という性格の異るところに起因していると思われる。この排列も物語に返して考察すると、幾つかの問題点が浮かび上がる。便宜上、前半を第一歌群、後半を第二歌群として論究を進めたい。

三

第一歌群は、前述の四季排列となっている。巻頭歌は、

ちゝみこの思ひにおはしましけるに年もたちかへり侍にければ

602 いかなれはくれてもとしのかへるらんわかれはいとゝ月日へたて、　いはてしのふの皇后宮

と、亡父の喪に服している「いはでしのぶ」の皇后宮の歌で始まっている。詞書に「年もたちかへり」と記され、歌中に「としのかへるらん」と年頭を意味する歌語が示されている。その後、梅（604～606）・桜（607～616）と移り、春の排列が続いている。その桜の排列にしても、609散逸物語「みかきがはら」歌では「昔の春」が、次の610611の散逸物語「かやが下折れ」歌には「今年の春」が詠み込まれており微妙な対応をみせている。加えて614の「源氏物語」歌は亡き妻紫の上を偲ぶ光源氏が詠じたものだが、詞書に「花のさかりにいにしへかはらぬを御らむして」と花の盛りが示され、同じく615616の「源氏物語」歌の詞書「花のちりたる梢ともを見て」では散花が示され、桜花の盛り―散る様を丁寧に並べようとする撰者の苦心が伺える。

夏は、617「かやが下折れ」歌の詞書「まつりの一とせ」と葵祭に始まり、あやめ（618）・ほととぎす（619・620）と配されている。

次の秋は、前半621から637までは大きく露＝涙で共通性を持たし、草の原（623～625）・浅茅（626～629）・萩（630）・花すすき（633）・山里（635～636）と代表的な秋の景が並べられている。その中で、628から631まで五首は辞世の歌とその返歌を中心とした小歌群である。特に630から三首の、病いの床に臥す紫の上と光源氏・明石中宮の贈答は、人々の涙を誘う場面であり排列上の一つの山場と思われる。

秋の展開において、特に歌語「草の原」が興味深い。

一条院かくれさせ給へりけるに冷泉院の一品宮とふらひ給へりけれは　玉もにあそふ一条院女一宮

623ありとてや人のとふらん消はてし露もとまれる草のはらかは

弘徽殿女御わつらひ侍けるに御こゝちもれいならて遺はされける　袖ぬらすの女院

624とゝまらは草の原までとはましをあらそふ露の哀なる哉

宣旨なくなりて後女院にまゐりてよみ侍ける　おなし太政大臣

625有しよのくさのはらそどみるからにやかて露とも消ぬへき哉

「草の原」は、元来草深い野原を表す意であったが、「源氏物語」花宴巻で、「なほ名のりしたまへ」という源氏の問いに、「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば訪はじとは思ふ」を答えた朧月夜の君の歌より、墓所を暗示する語となった。続いてその影響を受けた「狭衣物語」の狭衣大将の詠んだ歌「尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露」は有名である。以後この歌語は、俊成に「紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり、そのうへ花宴の巻はことにえんなる物なり、源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」（「六百番歌合」）と目わしめる所以となる。加えて顕昭も、「千五百番歌合」の「草の原」を含む歌の判で「ふるき人は、歌合の歌には、物語の歌をば本歌にもいだし証歌にももちゐるべからずと申しけれど、源氏、世継、伊勢物語、大和物語とて歌読の見るべき歌とうけたまはれば、狭衣も同じ事歟」と述べている。以上の如く「源氏物語」「狭衣物語」歌を経て、和歌においても「草の原」は草のおい茂った墓所を意味する様になったと考えられ、勅撰集としては「新古今集」で初めて入集される様になる。ただ和歌においては、「草の原―とふ」〈注二〉が墓所をイメージと重ねつつも、荒涼とした草原を本とし、勅撰集では秋・冬の部に収められているのに対し〈注三〉、物語では実際人の亡くなった場面、追憶の場で詠じられているといえる。「風葉集」において三首連続して哀傷部に採られているのは、意味深いと思われる。

続いて秋の排列は、月（638～640）そして晩秋に入り「をしみかほなるむしのこゑ」（641歌中）、「よはりゆくきり〳〵すのこゑも」（642詞書）、「別にし秋にもすゑはのむしの音」（同歌中）、「秋のすゑつかた」（643詞書）「過ぬる秋」（同歌中）となる。更に時雨（644～646）と続き、その時雨に打たれ散り行く様を、647散逸物語「あしたづ」歌では「梢にのこる木の葉さへ散みたれ行」と詠み込み、そしてその散った木の葉が河へ運ばれ底のみ

くづとなる様子（648歌中「河のそこのみくつをあはれとはみよ」）と描き出している。

第一歌群最後の冬についての排列は、649歌で「よはの霜」と詠じられ、650歌に「ふる雪をみるにつけても」と詠み込まれている。次いで651の第一歌群末尾の歌は、

女の思ひにて侍けるにとしのくれはてぬるもおとろかれて

夢かたりの前関白

651年くれてうかりし日をはへたつれと有しにまさる吾涙哉

と、詞書に「としのくれはてぬる」と記され、巻頭歌602の詞書「年もたちかへり侍にけれは」と見事な対応が示されている。

四

第二歌群は、前述の如く辞世の歌、つまり死期を悟った者がこの世への決別を込めて詠じた歌を最初に掲げ、葬送・服喪・喪をはつ・・・という時間排列がなされている。

まず652から659までの八首は、辞世の歌とその返歌によってまとまり、小歌群をなしている。652は「源氏物語」において桐壺の更衣が「限りとて・・」と詠んだ有名な歌で、この小歌群の冒頭に位置するのにふさわしいと思われる。歌中の「限りとて」「命は」は、次の653654の歌に続いている。655656は「有明の別れ」の贈答歌で、物の怪にとりつかれ衰弱の一途を辿る内大臣が、せめて死ぬ前に中宮と親子の各乗りをしたいと思い文をしたためる。事実に驚き夢かうつつか・・・とまどう中宮の返事を手に、内大臣はまもなく亡くなる。「有明けの別れ」の中でも作者の筆を尽した場面と思われる。657は散逸物語「聞のうつつの大納言」歌であるが、更衣と臣下の密通が描かれていたと想像され、題名の通り忍びに忍んだ逢瀬であったろうと思われる。ここはその更衣が臨終に当り、愛人に送った歌であろう。654から657まで歌中に「この世」の共通がみられる。

661の散逸物語「よもぎが原」歌は、詞書に「女のゆくへしられ奉らぬをおもほしなけきけるにはかなくなりにけるときかせ給て」と記され、人の死を伝え聞く意が示されている。「夕の雲」（659・660歌中）、そして「浮き雲」（661歌中）と雲に関する語が並び、次の663から667までの「烟」「空」に続く様工夫されている。

662から667までの六首は、葬送とそれをめぐり悲嘆に沈む歌が集められ、小歌群となっている。662の詞書「中納言のわさのよ」、そして663詞書「先帝の御わさのよ」、特に663歌には「やか

てかしらおろして北山にこもりけるとなん」と左註が付され、詠者中将の悲しみの深さが伺える。次に葵の上を亡くし悲しみに暮れる光源氏と頭中将の歌が配され（664 665）、愛する人二人に先立たれ、鳥野辺に送った「風につれなき」の関白の歌（666 667）と続く。

668から674までの七首は、喪に服する人々の悲哀の姿が語られている。668は「風につれなき」の散逸部分に属していた歌だが、詞書に「世のきこえをはゝかりて一品宮のふくもき侍らてよめる」とあり、一品宮と関白の悲恋には世間の憚り喪服を着ることのできない事情があったのであろう。669の詞書では「くろききぬにやつれさせ給ひける」姿が描かれ、670では、葵の上の死により薄墨色の喪服を着た源氏の姿が浮かび上がる。以下「ふちのたもと」（671歌中）、「涙のかゝるふち衣」（673歌中）「涙のかゝる袖のいろ」（674歌中）と、喪服を示す藤衣を詠み込み展開している。

665から682までの八首は、衣の色かわる—つまり喪があく時期の新たな悲しみの歌が並べられている。喪の期間は、妻の死による夫の服喪は三カ月、これに対し夫の死による妻の服喪は父母と同じく一年である。ここは乳母の死による四十九日の喪（678）や亡夫の喪（675 679）、そして紫の上の一周期の様子（680 681）などが示され、その悲しみの時間は様々である。

683から685までの三首は、涙にくれる近親者への弔問の歌が配されていると考えられる。683の散逸物語「嵯峨野」は、頭中将が父中務卿宮を失った姫君のもとへ送った歌であろう。684の「いはでしのぶ」は、関白が愛人であった前斎院の死に際し、親類ではないが伏見で喪に籠り、もう一人の愛人伏見大君（後の皇后宮）に弔問を促す文を送った折の歌である。685は「うつほ物語」〈注四〉歌で、詠者は物語本文では諸本ほぼ一致して昭陽殿となっている。また歌も、第三・四・五句が物語本文及び京大本と異るが、これは次歌686との歌語の共通（「死出の山路」）や、以下四首が脱落して京大本より補われている点から考慮すると、物語本文及び京大本本文が先にあり、脱落が生じた後排列の続き具合から変化が生じたものかと思われる。物語では、父季明を失い嘆く昭陽殿のもとに春宮から送られた文の返しである。

686は、難解な詞書をもつ歌である。「鳴門」は散逸物語で、「風葉集」に十二首収められている。

なるとの中納言女をゆくへしらすなして口によせて侍ける

686ゆきもせす帰りもやらすしての山みちの空にもまとふ比哉

この詞書をみると、中納言は愛人の行方を捜すべく口寄せしたという意で、この歌は招き寄せられたその愛人の霊が詠じたものとなる。「口寄せる」というのは、巫女・行者などに頼んで生霊・死霊を招き寄せ、言葉を交すことである。「栄華物語」にも死者の霊を呼ぶ場面が存し、作り物語にも存したかと思われる。ここは排列や哀傷部に入集されていることから考察すると、亡くなった女の霊を招く意と考えられ、霊が中有に迷っている状況を詠じた歌となろう。ただ小木喬氏(注五)は、「風葉集」に採られている他の歌などから、女の死を認めず、「死出の山」と「道の空」とを併立句とされ、「死のうか死ぬまいか」と「行きもせす帰りもやらず」迷っている女の生霊ではないかと論じられておられる。確かにこの686の詞書にも「女の死」についての記述はなく、「風葉集」の他の歌にも女の死は語られていない。「風葉集」の排列と物語本文に返した場合との場面の相違は、以前幾つか指摘した通りであり(注六)、また後述するがこの哀傷部は特に多い様に思われる。以上の点を考え合わせると、この「鳴門」の歌も、排列とは相違して女の死は語られていなかったかもしれない。

687から巻末歌700までは、夢・自然(水・忍ぶ草)・墓所そして年月経ぬるというまとまりをみせており、大雑把に追慕の排列と言えよう。687から690までの四首は、歌中に「夢」の語がみえ、亡き人の追憶を語ったものであるが、688の「いはでしのぶ」と690の散逸物語「波のしめゆふ」は、実際夢中に亡き人が現われるという詞書内容である。691692は、「源氏物語」で、691は大宮を偲ぶ夕霧の歌、692は八の宮と亡き大君を思う薫大将の歌である。各々亡き人を思い出す媒介として「遺水」が描かれている。693694の二首は、亡き人の墓所が語られている。693は、忍びたる女に先立たれた男(三位中将)が女の墓を訪ねる場面であり、694は、墓参りもしなくなった左大将を恨んで、愛人であった亡き更衣が夢に現われて詠じた歌と思われる。695696は亡き人の面影を導くものとして、忍ぶ草が詠み込まれている。

697から巻末までの四首は、歌中に「月日のゆくそしられける」(697)、「幾としとしをなからへぬらん」(698)、「としへぬる別」(699)、「年ふれと」(700)と、亡き人も追憶の彼方となり年月の移ろいを詠じたものと言えよう。

以上の様に第二歌群は、辞世の歌に始まり、人の死を聞く・葬送・服喪・喪をはつ・弔問・口寄せ・夢・追慕・年月をへて亡き人を思い出す姿までを時を追って丁寧に配されていると考えられる。

五

以上、第一歌群・第二歌群の排列について論じてきたが、各々物語場面に返して読むと、厳密に考えて「哀傷」の範中に入らないのではないか、或いは疑問のある歌が幾つか存する。まず613 621 689の「夜の寝覚」の寝覚の上の死を悲しむ歌について考えてみたい。

母のおもひにて北山にこもりゐて侍けるころ花をおりて中宮にたてまつるとて　　ねさめの右大将

613しらさりしみ山かくれの花のいろをあはれむかしとなほそみる

御ふくにおはしけるころ人の御返事に　　ねさめの中宮

621さらてたに涙ひまなき墨染の袖におきそふ秋の夕露

母のおもひに侍けるころ人の返事につかはしける　　ねさめの右大将

689わかれにしも暁の夢にても又はみる世のなきそかなしき

これら三首は現存本には存せず、末尾欠巻部に属していたと推定される。「夜の寝覚」は、「無名草子」に「寝覚の中の君のそら死にも・・・」と評され、偽死がその内容に盛り込まれていたらしい。偽死と言っても、一度は実際に亡くなり、かつ何らかの方法で蘇生したものかとされるが、本物語の評価につながる問題であり、猶今日の読者には充分理解し得ない部分である。問題となるこの三首は、寝覚の上の娘である中宮、及び息子である右大将（現存部分ではまさこ君）が、母の死を悼んだ歌である。613歌は「物語二百番歌合」にもとられ、その詞書は「ははうへかくれたまひぬときこえし時より、きたやまにこもりにて、つぎのとしの春さくらにつけて中宮に」とある。「かくれたまひぬときこえし時より」との書かれ方や、「風葉集」雑二（1270）の寝覚の上の歌の詞書「世になきさまにきこえてのち右大将北山にこもれりとつたへき、て……」（注七）などから、偽死の折の歌と考えられている。（注八）621 689に関しては、613と関連して寝覚の上がその蘇生を長く秘していた折の歌とみるか、末尾に真実寝覚の上の死が語られていたとする二説が存する。末尾欠巻部の復元にも大きな差異が生じ、物語結末の行方にもかかわる問題である。

どちらにしても、「風葉集」哀傷部は真実の死ではない偽死の折の歌を収めていることになろう。（或いは、寝覚の上の偽

死と真実の死両方に関する歌を収めていたとすると、この三首の詞書の書かれ方にその区別がないのは問題である。）この613歌を詠じた時、母の死を信じ切っていたことや、単なる死を装ったものではなく一度は死んだことから判断すると哀傷部に入ると思われるが、正確な記述とは言い難い。ここは詞書の不備ととるか、物語歌集としての排列の妙と言うべきだろうか。

次に、626627の「うつほ物語」の贈答歌について考えてみたい。

左のおほいまうち君身まかりて後女の思ひに侍ける人のもとにあさちにつけて遣はしける　うつほの左大臣北方

626こゝのみやあさちはしけきと思へとも又むくらはおほす宿も有とか

かへしなかきむくらに　橘の右大臣

627人はいさかれしとそ思ふたのめおきて露の消にし宿のむくらは

この歌の背景は、橘千蔭（右大臣）の北の方が亡くなり、降る雨の如く再婚の縁談話があったものの千蔭は亡き北の方一人を思っていた。ところが626の詠者左大臣北の方が、千蔭に思いを寄せ財宝の限りを尽くし気を引こうとする。この歌は左大臣北の方からの求婚の歌であり、物語ではこの歌の後に「おなじくは、同じ野におぼしめし給はぬ」という消息文が続いている。それに対し627は、千蔭の拒否の返事である。ただ両歌には、「あさぢ」「むぐら」「露」「かれ（枯れ・離れ）」「消ゆ」等が示され、亡き人を追慕する哀悼の響きの濃い歌であり、この排列の色彩の中で浮き立つことはない。「あさぢ」は次の628629の歌と共通がみられ、また前後十七首は「露」を含む歌で統一されている。詞書に「女の思ひに侍ける人のもとに」とは記されているものの、「左のおほいまうち君身まかりて後」が強く響いていると思われ、排列を優先させた詞書の書かれ方かと考えられる。

次に、第二歌群の660「浜松中納言物語」であるが、

この世のほかになりなはあはれと思ひなんやと申侍ける人に　はま、つの左大将のむすめ

660けふりけむ人を誰ともしらぬたに夕の雲はあはれならすやとある。この詞書をみると、左大将の娘が、私が死んでしまったならばあわれと思ってくれますかと言う人―つまり恋人に送

った歌ということが分かる。前歌八首が辞世の歌とその返歌による小歌群であり、また次歌は葬送の歌が並び、歌中の「けふりけむ」との響き合いから考察すると、辞世の歌の返しとして位置付けられよう。だがこの歌は、「浜松中納言物語」の逸亡首巻に属し、明確な内容は知り得ないが、巻二以下で二人が登場することからみて臨終が語られていたとは考え難い。諸先生方による復元〈注九〉に依ると、密会を重ねていた中納言と大君（左大将の娘）であったが、中納言の渡唐が決まる。この歌は、二人の愛情の程を確めた中納言の歌の返しとされている。二人の間の距離は海を隔てることとなり、また渡唐期間二年ともなれば命のさだめがたさもあり、歌に哀傷の響きがあるのも当然であろう。ただ物語場面からすると恋或いは雑の部に収められるべきであり、臨終の場なく哀傷部のこの位置に配されているのは、いささか疑問に思われる。631（621 689）「夜の寝覚」626 627「うつほ物語」そして686の散逸物語「鳴門」をも加え、これらの歌すべて詞書に偽りが記されているわけではないが、物語本文から鑑みると不十分な詞書の書かれ方であり、かつ排列上不本意な位置であると言わざるを得ない。その故逆に、「風葉集」鑑賞という視点に立つと、排列に解け込んでいる感じがするのである。排列鑑賞を優先させた詞書の記述ではないだろうか。

結　語

以上「風葉集」哀傷部について、その排列と各物語内へ返した場合の矛盾等いささか卑考を加えてみた。歴代勅撰集哀傷部の流れをみると、哀傷部はそれ程重きを置かれた部とは言えないにもかかわらず、この「風葉集」では歌数九十九首と大きな位置を示めること。その排列は、前半五十首は四季排列、後半四十九首は辞世の歌に始まり葬送・服喪と続く時間排列であること。また物語内へ返した場合厳密にみると「哀傷」の範中に入らない歌が、何首かあることなどが考究された。加えて、この排列を味わう上で詞書の書かれ方も無視できない問題であると思われる。〈注十〉

〈注一〉拙稿（旧姓　原田）「風葉和歌集構造試論―部立考」『中古文学』第二十八号。拙稿（旧姓　原田）「『風葉和歌集』の構造(一)　離別部の構成」『論叢』昭和五十六年一月。拙稿「風葉和歌集の構造―羇旅部について―」『平安文学研究』第七十三輯。拙稿「風葉和歌集の構造―神祇・釈教部について―」『論叢』昭和六十二年一月。拙稿「風葉和歌集の構造―賀部について―」『平安文学研究』第七十九・八十合併号。

〈注二〉「正徹物語下」（『日本歌学大系』第五巻）

草の原誰にとふとも比ころや朝露おきてかるとこたへん

草の原たれにとふとも歌をとりたり。狭衣に

たづぬべき草の原さへ冬がれてたれにとはまし道芝の露

と有り。源氏には、草のはらをもとはじとや思ふとよめり。その後

霜枯はそことも見えず草の原誰にとはまし秋の名残を

とよめり。かやうにみな草の原にはとふといふ事をよみたり。これらは皆とはましといへるを　いまはとふべきと引きかへたるなり。

とある。

〈注三〉八代集では「新古今集」に二首（秋上・冬）。十三代集になると、「続後撰集」一首（冬）、「続古今集」一首（秋上）、「続拾遺集」一首（秋下）、「新後撰集」六首（冬・釈教）となる。

〈注四〉父の左のおほいまうち君こ、ちかきりになりてみかとのか、るをりたにあはれともの給はせぬこととてなけき侍けるにうせてのちおほむふみ給はせ侍ける御返事にたてまつりける

うつほの宜耀殿女御

685 みし世にそかくもいはまし　なけきつ、又はみるよのなきそ悲しき

なくしての山路をいかでこゆるらん―京大本・物語本文

〈注五〉小木喬氏『散逸物語の研究　平安・鎌倉時代編』笠間書院。

〈注六〉〈注一〉参照。

〈注七〉世になきさまに聞えてのち右大将北山にこもれりとつたへき、て月のあか、りける夜なかむらんおもかけもみるこ、ちして思ひやられければ

ねさめの広沢の淮后

1270 しらさりし山への月をひとりみて世になき身とや思ひいつらむ

猶、同歌は「物語二百番歌合」にもとられ、その詞書は「右大将三ゐの中将ときこえし、きたやまにこもりゐぬとつたへききて」とある。

〈注八〉「夜の寝覚」の散逸部分の復元については、松尾聡氏『平安時代物語の研究』東宜書房、関根慶子・小松登美氏『寝覚物語全釈』学燈社（増訂は昭和四十七年九月）、阪倉篤義氏校注『夜の寝覚』岩波日本古典文学大系、鈴木一雄氏校注『夜の寝覚』小学館日本古典全集、大槻修・大槻節子氏『夜の寝覚五』新典社などに詳しい。

〈注九〉松尾聡氏校注『浜松中納言物語』（「宣物語」「平中物語」と合冊）岩波古典文学大系、伊井春樹氏「浜松中納言物語散逸部分の構想」『中古文学』第四号、久下晴康氏『平安後期物語の研究狭衣浜松』新典社研究叢書10など。

〈注十〉「風葉集」はその序文に、「これをもと、してさらにえらひそへ、まきをわかちことはをと、のへてたてまつるへきおほせことになんありける」とあり、この箇所は巻（部立）に分けた後、「ことはをと、のへ」と排列を考え詞書を書き直したことに相当するのではないだろうか。但し、他部をすべて調査し結論をだす問題であるのでここではあくまでも推論として述べさせていただく。